

ルージュバックから馬単で5頭に流す

たまには“まとも”に考えてみようと、競馬新聞を買って喫茶店に入ってみた。コーヒーを頼み、タバコを取り出して火をつける。そうして、買ったばかりの競馬新聞を広げる。若いときは、ここから“至福の時間”が始まった。毎週、毎週、週末にこうした時間がくるのを楽しみに、1週間を過ごした。

競馬は競馬場で馬券を買って観戦しているときは、じつは本当は楽しくない。まして、馬券で負ければ、もっと楽しくない。本当に楽しいのは、予想をしているときだ。

さて、今年の桜花賞は、前走、牡馬相手のきさらぎ賞を圧勝した「男勝り」のルージュバックで断然の声強い。3戦無敗で文句なしの戦績だから、1番人気になるだろう。

「男勝り」で思い出すのが、1975年の桜花賞馬テスコガビーだ。テスコガビーは桜花賞馬というより、史上最強の牝馬だった。ルージュバックと同じように、牡馬相手の京成杯で朝日杯
3
歳
S
の
2
着馬イシノマサル（のちの菊花賞馬）を下して優勝し、桜花賞前は東京
4
歳ステークスでカブラヤオー（皐月賞、ダービーの
2
冠馬）のクビ差
2
着となった。

もちろん、桜花賞は断然の1番人気となった。

当時は、馬券は枠連。テスコガビー（菅原泰夫）は単枠指定で3枠に入った。「3から買えば必ず当たる。考えなくていいから楽だ。オレは総流しにしておくよ。

2

着に人気薄がくれば儲かるからさ」という、友人の結論が気にいらず、私は、相手を絞ることにした。

「そんな、運頼みにする買い方なんかするなら、競馬なんかやる意味ないだろう」と、私は彼に毒づいた。

友人と別れ、一人で喫茶店に入った。競馬新聞を隅から隅まで読んだ。テスコガビーの2着馬探しに

2

時間は費やした。そうして、

2

番人気

5

枠トウフクサカエ（福永洋一）を切り、

3

番人気

8

枠サウンドカグラ（武邦彦）で勝負することを決めた。馬券は

3-8

。この

1

点に絞った。

レースは、当日、友人とテレビで見た。テスコガビーは逃げ馬ではないが、他馬とはスピードが違うのですぐに先頭にたち、楽々と逃げた。4コーナーで後続を離すと、直線では後続との差が開く一方。カメラはテスコガビーを映しているだけなので、後続馬は画面から切れてしまった。

杉本清アナの実況は「後ろからはなんにも来ない、後ろからはなんにも来ない、後ろからはなんにも来ない」の連呼で、なにが来ているのかわからなかった。

レース後、2着にはジョーケンプトンが入ったことがわかった。ジョーケンプトンは8番人気の抽選馬。着差は「大差」と表示され、なんと時計は 1.9秒差。馬券は2-3で810円だった。

「ほうら、人気薄が来たじゃないか。でも810円じゃあな。7000円買って1100円しか儲かんない」と、友人は言った。

私はといえば、3-8に1万円入れて、パーである。

「なに言っているんだよ。ソンしなかつただけよかつただろ」

それだけ言うのが精一杯だった。

それからは、1点勝負をやめた。3点買いを基本とし、ときには総流しもした。もちろん、それ以外にも、あらゆる方法を試みて馬券を買った。しかし、儲かったことはほとんどない。

その後、テスコガビーはオークスも“ぶっちぎり”で勝った。しかし、秋は故障して休養に入り。翌年、復帰戦となった平場のオープンで負けてまた故障した。そこで引退という案も出たが、馬主の意向で、再度、復帰に向けて調整を続けたが、1977年1月、調教中に心臓麻痺で死んだ。

喫茶店に入り、“まとも”に予想したので、ルージュバックが本命だ。ただし、相手はまったくわからない。3連勝馬がまだ2頭いるが、本当に強いかわからない。それ以外の有力馬も甲乙つけがたい。

それで、やはり、好みで選ぶことにした。ムーンエクスプレスは夢があっていい。月急行に乗ってみたいものだ。ノットフォーマルは、カジュアルでいいわけなので、これも落とせない。アンドリエッテはノーベル賞の生みの親ノーベルの母親の名前だというから、ダイナマイト級か。キャットコインは、「猫に小判」を連想させる。テンダリーヴォイスは天国の声（母の声）なので、これも聞きたいものだ。

というわけで、この5頭に馬単で流す。